

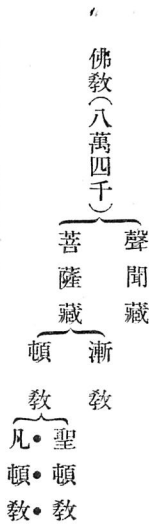
成覺房幸西の佛教觀

安井廣度

幸西の教學に就ては、凝然が「淨土源流章」の中に、彼の著書中の文句を若干引用してその一斑を述べたる外、別に纏つたものはない。それで從來學者は章の記述を唯一の便とし、それに古い淨土宗の章疏に出る所の一念義に關する文獻を參考して之を講じて來たのである。しかるに、先年本學の故山田教授に依て、大谷派の學頭惠空師の藏書中から、遺著の一部「玄義分鈔」が發見せられ、その後、恩師住田教授は「淨土源流章解説」中に本鈔を加味して彼の教學を考察せられ、幸にその面目を明にするに至つたのである。しかし、簡古にして難解なる本鈔は未だ具體的に紹介されてゐないから、師説に導かれ、是を資料として茲に先づ彼の佛教觀(教判論)をまとめて見たのである。

—

幸西の教判は近く淨土源流章に引く所の『略料簡』の文に出てる。それに依ると、彼は佛教に八萬四千の法門ありとし、先づそれを聲聞菩薩の二藏に收め、その菩薩藏を頓漸の二教に分ち、更にその頓教を聖凡の二頓に分別し、凡頓教を以て佛教の「正門」とし、元祖(法然聖人)相承の正統淨土門とするのである。即ち左の如し。



成覺房幸西の佛教觀(安井)

之を道綽の聖淨二門説に配すると、いふまでもなく聖頓教までが聖道門凡頓教が淨土門であつて、彼はこの二門判をも用ひてゐる。しかし、この教判は道綽の二門を特に善導の玄義分から詳にせるもの、如く、佛教を二藏二教に分けたのは玄義分の説偈分と宗旨門に依り、頓教を聖凡二頓に分けたのは同じく序題門等の意に依つたものと思はれる。さうしてこの教判の特色とする所は元祖の二門廢立説を顧み、更に天台の教判を參考して徹底的に聖道門を淨土門に入る權假方便の教とした所に在つて、淨土宗西山派の行觀は次のやうに之を評してゐる。云く。

一念の成覺房は本宗天台宗の人にて有りし故に天台の教相を淨土の教相に得し入れて諸行念佛を以て廢立に料簡する也、彼宗には廢權立實と云て法華より外の諸教をば權教と云て權を廢して法華を眞實の教と立する時に一代諸教は實教に入る權方便と云様に、淨土には他力本願念佛の眞實を出世の本意と云て念佛より外の諸行をば權方便と云て廢の爲に説くと料簡する也。其れを取て一念義と立する事は、上の本願には乃至十念と立すと雖も、下の流通に至て見れば佛告彌勒其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利卽是具足無上功德と説く時に一念を本意至極と得て、以て天台に芥爾の一念と云ふを此の一念に得し入れて一念義と立す、此一念を定心發得の一念と云て法華の至極は淨土の他力に來て極まる事を得る故に、尙ほ法華の位をば方便の分と云て觀經を以て佛法の至極眞實の出世本懷と云て、此經を序題門の釋に料簡し合て、隨緣八萬の聖教は權方便の教にて觀經を説くべき月を待つ程の手愛と云、一代諸經は此經の化前序と立する也、一念義と云ふは此の謂れ也、是れ卽ち白骨の義也、法然聖人の御義には非ず云々(玄義分私記一ノ十二左)。

しかし、聖道方便説は既に元祖の語録(淨土隨聞記等)にも見えてゐるし、西山上人や親鸞聖人にもその説があるか

ら直に以て異解とはなし難く、又、行觀が幸西の一念義を天台の一念に準じて定心發得の一念と解したことも當らな
いから、現代としてはもつと冷靜に(宗派感情を離れて)又善意を以て彼の教學を檢討すべきだと思ふ。

二

幸西の教學は廢立に始終してをり、『玄義分鈔』の説偈分に先づその意趣をあらはし、觀經に依て深信する者は佛心
と相應するがその他の「衆願は歸せざるが如し」(三)と、聖道門のみでなくあらゆる自力的な行きの方を批判し
てゐる。かくて、この意味は鈔の全體に漲り、從て參考とすべき箇所も少くないのであるが、能くまとめられてゐるの
は序題門の釋であるから先づそれに依て教判の大意を窺ひ、後に聖道方便の論理をたづねようと思ふ。序題門に云く。

竊以、眞如廣大五乘不測其邊、法性深高十聖莫窮其際、眞如之體量量性不出、蠢々之心、法性無邊邊體則元來不動、無塵法
界凡聖齊圓、兩垢如々則普該於含識、恒沙功德寂用湛然(第一段)。

但以垢障覆深淨體無由顯照、故使大悲隱於西化、驚入火宅之門、灑甘露潤於群萌、輝智炬則朗重昏於永夜、三檀等備
四攝齊收、開示長劫之苦因、悟入永生之樂果(第二段)

不謂群迷性隔樂欲不同、雖無一實之機、等有五乘之用、致使布慈雲於三界、注法雨於大悲、莫不平等治塵勞、普沾未聞
之益、菩提種子藉此以抽、心正覺之芽念々因茲增長、依心起於勝行、門餘八萬四千、漸頓則各稱所宜、隨緣者則皆蒙解脫
(第三段)。

然衆生障重取悟之者難明、雖可教益多門、凡惑無由遍攪、遇因草提致請我今樂欲往生安樂、唯願如來教我思惟、教我正
受、然娑婆化主因其請、故即廣開淨土之要門、安樂能人顯彰別意之弘願、其要門者即此觀經定散二門是也、定即息慮以凝心
散即廢惡以修善、廻斯二行求願往生也、言弘願者如大經說、一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增
上緣也(第四段)。

成覺房幸西の佛敎觀(安井)

又、佛密意弘深教門難曉三賢十聖弗測所闕、況我信外輕毛敢知旨趣、仰惟釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎、彼喚此遣豈容不
去也、唯可勤心奉法學命爲期捨此穢身即證彼法性之常樂(第五段)。

彼は右のやうに序題門を五段に分け、先づ第一段を以て「衆生悉く佛性を具して如來所化の機なることを明す」文とするのである。然るに、この中、初の二句に就ては異説があつて、九品寺流では十聖を五乗中の菩薩乘に收めて二句を同意に解し、鎮西流では五乗中の菩薩を小乘三祇の菩薩と大乘地前の菩薩に配し、十聖を十地の菩薩にあて、前者は全然眞如法性を見ないから不測其邊といひ、後者は分に是を證るから莫窮其際といつたとするので、彼は後の義に之を釋してゐる。即ち、善導の用語例に注意して、上品上生の疏文に「持五乘三佛之機云々」とあるは極樂を佛として等覺以下を五乗とし、説偈分に「十地三賢海云々」とあるは等覺以上を佛として十地以下を五乗とし、今こゝは十聖以上を佛として三賢(十迴向十行十住)以下を五乗とすといひ、初地以上は眞如法性の一分を證するから果位に收めて分證の佛とするのである。そこで、彼は十聖と五乗を報化二佛の所化に配して次のやうに述べてゐる。

其所化に二類あり、一は五乗(凡)、いまだ眞如をはからざるが故に生死界に居す、化佛の所化也。二は十聖(聖)、いまだ眞如をきはめずと云とも分に證す故に涅槃界に居す、報佛の所化也。當知八相示現(化佛)の本意、五乗(凡)をしてひとしく報佛の上に入らしめむが爲也(二六)。

更に「無塵法界」の句に初頓華嚴の意を窺ひ、「凡聖齊圓」の句に鶴林涅槃の意を見て、こゝに釋迦一代の始終を顧み、兩垢如々(即ち有垢眞如と無垢眞如とを凡(地前)聖(地上)に配して、二佛の所化の別なることを注意してゐる。

次に、彼は第二段を以て「如來出世の本意を述ぶる」文とし、三界有漏の善惡を深刻に反省批判して之を「苦因」と

し、界外法性の常樂を無漏眞實の「樂果」とし、始め三七日夜（華嚴）より終り一日一夜（涅槃）に至る如來出世の本意は、衆生長劫の苦因を開示して永生の樂果に悟入せしめんがため、即ち有垢眞如の衆生（凡）をして無垢眞如へ入らしめんがために外ならぬとするのである。

次に、第三段を「十聖を除て五乗の教を説く」文としてゐるのであるが、その意味は、十聖を除いて五乗の凡夫を救はんがために必要な種々の教を説くとも解せられ、又、十聖を除いて凡夫を救はんがために必要な五乗の教を説くとも解せられるので、稍々曖昧な表現である。しかし、何れにしても釋迦一代の説教は有垢眞如の凡夫を無垢眞如の聖者たらしめんとするものであつて、その説教の内容は、前引の『略料簡』に依ると八萬四千の法門、即ち三乗教に約すれば二藏二教二頓であり、序題門の文に徴すれば「門餘八萬四千」であり、又、菩薩藏に約すれば「漸頓」の二教であるのである。そうして前の『略料簡』では凡頓一乘を八萬四千の内に收め、こゝでは法華經の寶塔品や觀經の下品上生等の文に依て之を門餘の道とし、又、漸頓の頓にくみ入れてゐる。但し、何れにしてもこの段では凡頓一乘は未だその絶對性を顯はさないものであつて、従て、五乗の機はそれら五乗の教に依て應分の利益を得た丈であるとするものゝやうである。即ち「皆蒙解脫」の句を釋して「淺深あるべし」といつたのは、爾前に於ても凡頓一乘の教に依て深い利益を得た者があつたのであるが、それをおしなべて皆な隨縁の一門に依て淺い利益を得たのみであるとするものゝ如く、彼は次段の意味をむかへて、

雖無一實之機等有五乘之用といは眞如の機なしと云とも弘願の機ありと也、五乘不測其邊故に眞如の機にあらず、託佛願五乘齊入す、故に弘願の機也、……故に佛の願方の外に都て眞如を證する門なき也（10. 7）。

と注意し、次の段に於て、「義に淺深あり、淺といは隨緣の一門に入る、深といは此の一門(觀經、凡頓一乘)に入れば多門を遍攬すと也云々」と述べてゐる。

次に、第四段は「三乘の道をして、凡夫の教を行ぜしむ」る所で、こゝに三乘の道といふは八萬四千の隨緣漸頓の道をさし、凡夫の教といふは門餘凡頓の一乘をさすべく、佛出世の本懷は韋提の致請を緣として今この觀經に顯はれるといふのである。彼はかう述べてゐる。

定散といは諸經即八萬四千調機門也、弘願といは大經別意究竟の眞門也、然るに、此の觀經は此等の機法の諸教を一卷に攝して往生の一門を成ず、故に但能依此經深信行者は多門を遍攬すと也、故に遇因韋提已下は佛心と相應す (p. 8)。

善導は此段の初に雖可教益多門云々といつた、我々凡夫は愚かな爲に多數の教門を遍く手に取つてその眞意に通ずることが出来ないといふのである。そこで、釋尊は觀經の定散要門に諸經即ち八萬四千の教を收めて之を調機弄引の教とし、又、彌陀自ら大經に説く所の別意の弘願を顯彰されたので、この觀經には斯く調機の教と眞門の法とが一巻に收められて往生の道を明にしてゐるから、此經に依る者は全佛教の歸趣を辨へ能く多門を遍攬するので、つまり此經に依て深信する行者は佛心と相應して眞實に救はれるといふのである。

それから第五段は「上の義の難曉ことを顯す」ので、彼は之を一僧指授の因緣に結びつけて意味深く解釋し、次の文を以て聖道方便淨土眞實の義を結んだのである。

上來五句の不同ありと云へども八相示現の本意定散(聖道門など)の方便を演て長劫之苦因を開示し彌陀の弘願を

説て永生之樂果に悟入せしむ。然るに、安樂の能人此の經を來證して別意の弘願を顯彰す、二尊の計ごと異なる事なく、善惡の凡夫をして願力の強緣に託せしめて卽證^{シム}ニ彼法性之常樂^ヲと也 (p. 9)。

猶、同鈔宗旨門の下では、諸教を觀佛三昧に攝めて念佛三昧に入る方便假説の教とし、別時門の下では「聖道の別時」と「衆行の別時」をたて、逆に聖道門を別時意趣の説としたのである。顧みると、もと別時意の難はその昔、通論家の學者から淨土門(觀經の下々品)に向けられたもので、玄義分の釋は之を會通したものである。然るに、彼はその意を汲んで巧に疏文を分解し、逆に彼等の説を別時意の方便説としたので、實に今昔の感があるのである。尤も聖道自力教を別時意とする事は西山上人ものと同するので、淨土教徒としてそれはさうあるべきであらう。

三

然らば、彼は如何なる論理を以て聖道を方便とし、特に之を無得道の教としたのであらうか。之に就て先づ氣づかしめられるのは、自力修行の成ぜざること、彼は例の如く聖道門を觀經の觀佛三昧に收め、眞身觀の「其光明相好及與化佛不可具説」の文や、雜想觀の「非是凡夫心力所及」の文や、定善義の「莊嚴微妙出過凡境」の文に依て、「像觀は且く成すべきに似たれども宗に非ず、眞身は宗也と云へども成すべからず」と斷じ(三〇)と、又、「たとひ現益實に有とも三惑異時に斷ずそれ頓教に非ず、何に況んや成ぜざるをや」と叫んでゐる(三一)。尤もかうした事は淨土教徒の常に難とするところで、そこに淨土念佛の實際的な成立根據があるのであるが、しかし、多くの場合(例へば鎮西流の如く)それは修行不堪の機に約していはれるので、堪能の機なれば能く之を成すとするのである。然るに、彼はさうした堪能の機を何處にも見出さず、「三界生死のあひだに總じて一實眞如の機なし」(三二)と斷定したので、さすがに辛

棘な洞察である。彼はかういつてゐる。

三界の極位に居して十聖の初地に隣るもの真如の機に當れりと云とも、修福念佛を以て無生の國に入る事は佛法不思議の力也、敢てその機にあらず(p. 7)。

三界の極位に居して十聖の初地に隣るものといふは三賢の最十廻向滿位の菩薩をいふのであらう。しかも、さうした人々を真如の機に非すと斷定したのは實に聖道自力教を轉覆せしめるものである。抑、真如佛性にはそれ自らに内熏力があつて漸次に我々凡夫を覺まさせ、我々凡夫は是に順修して佛果に赴くものとされてゐる。然るに、彼は本具の佛性を認めつゝ、しかも自力の得道を拒んだので、こゝは深く考へさゝれる點である。蓋し彼に依ると、本具の佛性なるものは煩惱の氷が解けて菩提の水となるやうに、煩惱と菩提の同性同質たる點から煩惱に即して本有の佛性ありとするので、しかし、それは煩惱それ自らに直に菩提を創造する力があるといふことではなく、恰度熱を待たない限り氷はいつまでも氷であつて水とならないやうに、阿彌陀如來の無縁の慈によらない限り、煩惱はいつまでも煩惱であつて菩提とはならない。さういふ意味に於て自力を不成とし一實真如の機を認めなかつたのではなからうか。惜むらくは此點に關する文献は何も残つてゐない。しかし右に述べたやうに、彼は自力不成を以て聖道方便説の論理とするので、既に自力の修行で入聖することが出来ないとすれば、此土入聖を標榜する聖道門は眞實の教ではなく、淨土門に入るべき調機弄引の方便説と解せられるといふのである。以上は「證」の方面から聖道門を批判したのである。次に同じやうなことであるが「行」に就て之をいふと、我執が取れない限り所詮自力の修行は眞實の行ではなく、それは畢竟凡夫の行の雜毒虛假たることを反省せしめて他力眞實の行に入らしめんとする方便誘引に外ならぬといふの

である。そこで彼はかう述べてゐる。

乘念卽生といは稱佛及已前の諸行皆機なることを標す(一、354)。

諸善を行じて往生を願するものは但言發願不論有行也と也、斯乃諸善をきらふが故に……、又、行を帶しながら願と云事は、例せば受法を具しながら機と云ふが如し(p. 34)。

此の文は彼の衆行別時説卽ち諸行方便説を述べたものであるが、彼は聖道門も淨土の要門も一列に行的な道として批判してゐるから、こゝに聖道行に對する彼の考を見ることが出来るので、彼は一往聖道の修行を行と認めつゝ、しかも、それは有漏の善行で眞實の行でないから、恰度九品の受法が如來の本願を信する前には機の色たるが如く、聖道の行も佛に成りたいといふ願の悶へに外ならぬとするのである。平たくいふと、座禪や觀念を凝して修行にいそしんでも、我執に拘つて本具の佛性を實現し得ない限り、それは求道のもがきに外なく、到底自らを救ふ眞實の行ではないといふのである。されば、自方の修行を標榜する聖道の諸教は眞實の道ではなく、實は自方の不成を自覺せしめて他方眞實の行に入らしめんとする方便施設に外なく、彼は終に修行の階位をも教門の假説と斷定したのである(二)。

云く。

凡す内外二凡小乘の聖位等實にありとしれる是錯の根源也(p. 35)。

いまだ無爲涅槃の界に入らざる前に、三乗の道を修して斷惑證果すといは皆是不實也、若ししからば初地の下も常没の上に都て所化の衆有るべからず、何の義に依てか能化の佛土あるべきや(p. 34)。

24 品を以て但理、華嚴法華等を事理、大小二經を單散、觀經を定散を説く教とし、理事定散の優劣を全く逆に見たので

ある。云く。

彼の宗家等の意、多く散を方便として定を眞實とし、事を方便として理を眞實とす、其の意甚錯れり、云何が知る
とならば、其の宗の教道は敢て凡夫の入路にあらず、三界生死のあひだに總じて一實眞如の機なきが故也(P. 19)。
經能持法理事相應定散隨機義不零落とら云は、方便の教の遠近の次第をつらぬ、理の教より事の教に入るを相應
といふ、即教意に相應す、定散の次第も又如_レ此、理事定散乘願等の次第若し一々に違せずは、佛教に相應し佛
意に相應し佛願に相應すと云べき也、……凡_レす理事定散の諸教は乘願の爲め……能_レく此の益を持って義をして零落
せしめず、故に經とすと也、全く餘經に異せり(二)。

鎮西派のやうに教法の優劣を判するに、機からすると淨土門は聖道門よりも勝れ、法からすると淨土門は聖道門よ
りも劣るといつた見方は不徹底で、此點彼が一度は佛の願意を考へ二度は機の趣入を省み、機法の兩面から、理より
も事を、定よりも散を、定散よりも乘願を勝とし、こゝに聖道方便の論理を見出してゐるのはさすがに徹底してゐる。
顧みると、宗教の第一原理を説明するに、實大は權大よりも事的であり、密大は顯大よりも事的で、概して理から事
へと進んで來てゐるが、それでも何となく事よりも理を深しとする因襲が離れてゐない。しかるに、彼は斷然理より
も事を、定よりも散を、定散よりも乘願を勝としたので、宗教の第一原理は斯くの如く具體的なものであらねばなら
ぬといふのである。斯くて、彼は維摩大品の如き但理の教を華嚴法華の如き事理の教に收め、更にそれを定散を説く
觀經に望め、華嚴法華の事の念佛三昧(念佛に他の凡てを收める)を觀經の像觀に同ぜしめて眞身觀の方便とし、「眞身

觀の念佛三昧は諸經の念佛三昧を結成す」といひ(p. 18)、但散の大小二經を背景として觀經の散(彼は多くの場合、散善の語を念佛の義に使用してゐる)を佛出世の本懷とし、「觀經の中に正しく散を宗として傍に定を宗とする事は、但理唯聖等の教に依る、漸教の衆生をして凡頓の教に引入せしめんが爲也、方便の遠近次第の相順正しく此の義也」(p. 19)と述べ、更に宗旨門の二藏判を捉へて、「諸師所引の七部及觀佛三昧等の同位の菩薩藏頓教を擧て漸教に攝し小乘に攝して、唯念佛三昧の正宗のみ眞の菩薩藏頓教なる事を知らしめむと也」(p. 25)とも釋してゐる。

四

然るに、こゝに一二の疑問がある。

(一) 彼は三界には常没の凡夫しかるないので、從て凡ての者は彌陀の他方本願に乗託するより他に眞に生くべき道はないとした。然らば、釋尊の如き龍樹の如き人を如何にするか、夫等の人々は眞如の機で自力道で證つた人と考へられるがそれは如何に見るべきかと、さういふ疑問がある。之に對して彼は次のやうに述べてゐる。

上品下生の破文に爲其といは、十方淨土に生ぜしめむが爲に勸めて西方に生ぜしむるに籍らんやと也、爾れば、此位の菩薩は已に西方に生じ竟て穢國に還來す、故に極樂の聖衆といふべし(p. 33)。

二は實無變化、實有變化に同じて不實也、所謂報身の如來地上の菩薩等の化度利生の爲に穢土に化現して、斷惑證理し入聖得果すと云へども、有爲五陰の依身に同じて生滅する是也、四念處四正勤等は彼の修行道法也(p. 33)。その意は、此種の人を以て或は還相の菩薩とし、或は化現の聖者と仰ぐのであつて、之を模することの錯を注意したのである。

(二) 然らば、さうした化理の聖者はもどうして聖位に入られたのであらうかといふと、夫等の諸佛は皆な彌陀を本師本佛とするので、盡天盡地彌陀他力の一道より他に救ひの道はないといふのである。云く。

凡す諸佛の因行總別二種の願、皆是垂跡の利生果後の方便也、具に法華の本跡二門賢愚經等に説か如し、利生方便云何とならば、總願の方便は別願のため且く果の不同を辨じて發露^レ佛をえらばしを別願の方便は彌陀の爲め諸佛に留礙して不

取正覺と云へり 四十八願の方便は念佛往生の爲め、十念の方便は一念の爲め也、故に觀經には三世諸佛淨業正因と説き、般舟三昧經には三世諸佛持是念阿彌陀佛三昧皆得成佛と云へり、十劫正覺豈誠説ならむや。然則覺行窮滿の無縁の慈、常没の衆生を攝して報身常住の上に生ぜしめむか爲に大乘廣智を顯開す、其より已來、過去現在の諸佛菩薩此の大乘に運載せられて生死の苦海を度す、入聖得果の道、無始已來唯此の一乘のみ有て無二也、故に上從海徳初際如來乃至今時釋迦諸佛皆乘弘誓勸念彌陀、此の義を以ての故に、如來出世の本意顯に別意の方便を開示して隱に一乘の眞門に悟入せしむ。方便は一乘の爲に説き一乘は方便の爲にまふけて敢て違背せずと云とも、機に淺深有が故に教に隱顯あり……、但し經(諸?)佛の前後に至ては唯佛獨明了にして因位の智力にあらず(1)。(2)。

之に依ると、彼は彌陀に本迹の二門を分ち、迹門の彌陀(十劫成道)を以て本門彌陀の無縁の慈をあらはせる果後の方便とし、又、諸佛にも本迹の二門を分ち、本門の諸佛は何れも本門彌陀の無縁の慈に依て入聖得果し、迹門諸佛の總別二願は何れも衆生をして彌陀の本願(無縁の慈)に入らしめんがための果後の方便と解せるが如く、是れ即ち本門の彌陀を以て諸佛を統攝する凡頓一乘の説である。

因に、この本師本佛論は前の佛性論と直接關係するので、もつと考慮するべきものであるが、憾らくはそれに

關する文獻を傳へない。

(二) 廣く一代諸經を見ると、淨土門を説く經典よりも聖道門を説く經典が多いのであるから、聖道門を以て淨土門に入るべき方便教とすることは餘りにも無謀であらうと、かういふ疑問も生ぜやう。しかし、彼は右に述べたやうな理由から、何れの經典にも必ず「凡心になふ易行あるべし」との考に想到し、諸經に隱顯の兩面をたて、能く之を解決したのである。云く。

今此の一乘に隱顯あることは、證果は高妙にして心想羸劣なり、大聖の智力に非ずは生死を出べからず、故に必ず凡心になふ易行あるべし、眞の一乘是也、此の一乘若し顯説せば方便の諸教廢すべし、眞實は易行にして方便は難行なるが故に、方便の門若し無くば一乘の機あるべからず、此義を以ての故に、諸佛出世の本意、難行の一乘を顯説して易行の一乘を了せしめむが爲也、然則顯の一乘の文に依て隱の一乘を了すべし(2. 21)。

その他、法華經の文を巧に解説して弘願念佛の本懷を明にするなど自由自在である。

五

以上、私は聖凡二頓を聖淨二門の意味に解釋し(2. 23)夫等聖道の諸教(聖頓等)は畢竟淨土門に入るべき調機弄引の教で、淨土門に入ると共に永く廢さるべきものなる所以を叙し終つた。しかるに退いて考へると、彼は一面聖道門を以て淨土の菩薩の修行相を説いたものと考へてゐたらしく、聖凡二頓を簡單に凡聖二教と呼び(2. 12, 19, 36, 47)又爲聖爲凡の義を以て之を解したのは其意を示すが如く思はれる。

凡す理事定散の諸教は乘願の爲め、乘願の當教は往生の爲め、往生の大利は證彼無爲のため、無爲之法樂は成佛

28
の爲也(p. 12)。乘願往生^二下は事より理に入る(p. 12)。

直願^三佛果^二而即得當^名如來藏頓教一乘、是爲聖教。先求^三淨土^二順次生階^三菩薩初地、是名^三菩薩乘頓教一乘海^一。
(源流章所引『稱佛記』)。

彼は五乘を凡十聖を聖とし、さうした五乘常没の凡夫を報佛の土に入らしめ無垢真如を證らしめるを凡頓の教としたのである。しかし、彼は未だ往生即成佛の義をいはず、右の文にも見えるやうに淨土に往生して先づ初地に階ひ、更に修行して成佛するとなすので、説傷分の生死甚難厭等の四句を解して「淨土を勸む必ず諸佛に歴史して菩提を成するが故也」(p. 12)といふもその爲である。さうして乘願往生の後は逆に事から理に入るのだから、理を主とする聖道の諸教はもとさうした淨土地上の菩薩の爲に設けられたものではなからうか。先に引く序題門の釋に「十聖いまだ真如をきはめずと云とも分に證す故に涅槃界に居す、報佛の所化也」といふ報佛の所説ではなからうか。殊に第三の文に、頓教一乘を菩薩乘のそれと如來藏のそれに分けて、先づ淨土を求めて順次生に菩薩の初地に階ふものと、直に佛果を願うて即得するものにしてゐるのは此意味を顯はすが如く、かうして聖凡二頓の語義が能く解されるのである。蓋し彼に在つては入初地の法は唯有淨土一門であるから、直に佛果を願うて即得する如來藏頓教一乘海、すなはち爲聖教(聖道門)は淨土の菩薩に對していはるべきことであらうと思ふ。

要之、聖道の諸教は淨土の菩薩の修行内容若しくは自覺内容をあらはしたもので、之を我々穢土の凡夫に説き示された所以は淨土門に入らしめんがための調機弄引に外なく、従て、我々凡夫としては能く方便施設の意を解して凡頓

一乗に入ることを要すべく、彼は斯くの如く佛教を解したのである。之を他の言葉でいふと、三界生死の衆生は凡て有限の凡夫で、有限の凡夫には到底無限を創造する力がないから、深く我が機を省みて界外淨土の無限なる涅槃界に心を寄せ、阿彌陀如來の無限なる本願力に乗託して——彼は此點に於て一念義を主張する——淨土に往生し、無限なる地上の證果を得よといふので、釋尊等を模して自力斷證の聖道門に就かんとするは全く佛意を錯つたものだといふに歸するのである。—(昭和一一、一、一〇)—